

7. 腎腫瘍における RI imaging, CT の診断的価値について

大石 幸彦 町田 豊平
三木 誠 上田 正山
木戸 晃 柳沢 宗利

(慈恵医大・泌)

CT の開発と普及は泌尿器科領域でも従来の腎尿路の形態診断法に加え、新しい診断情報をもたらすようになった。

今回、われわれは腎腫瘍における RI imaging と CT の診断的価値について検討した。

対象とした症例は腎腫瘍 16 例 (腎癌 13 例, 腎盂腫瘍 3 例) で, 男 11 例, 女 5 例, 年齢は 45 歳~76 歳 (平均 59 歳) である。全例に RI imaging と CT を行なった。

CT は CT/T, Somatom S を用い, 全例で造影剤による enhancement を行なった。RI imaging は PHO/Gamma IV γ -カメラと Micro Dot Imager Model 3132 を使用し, $^{99m}\text{Tc}(\text{Sn})$ DTPA, ^{99m}Tc -DMSA 10 mCi を用いて血管相, 機能相イメージを撮影した。

結果: 1) RI imaging, CT は腎腫瘍の診断に有用である。2) RI imaging は腎腫瘍の存在の確認と同時に腫瘍部の血流分布状態を簡単に知ることが可能である。3) CT は腎腫瘍の解剖学的広がり, 周囲臓器との関係, 大動脈周囲リンパ節転移や腎静脈内腫瘍血栓形成を知ることができる。4) CT は avascular type の腎癌の診断に特に有用である。5) 腎癌と腎盂腫瘍, 腎血管筋脂肪腫との鑑別が困難のことがある。

結論: RI imaging, CT は腎腫瘍の診断, 病変の進行を知るのに価値ある検査法であり, 従って, 治療方針の決定, 予後判定に役立つ。

8. ^{67}Ga -citrate scan によって診断しえた Uveo-parotid fever の 2 例

藤岡むつみ 真下 正美
平岡 久樹 西村 克之
宮前 達也

(埼玉医大・放)

井出 雅生 木下信一郎
土肥 豊

(同・2 内)

サルコイドーシスを疑われ, ^{67}Ga -citrate scan の全身スキャンにて両側眼窩, 唾液腺, 肺門に異常集積を認め, Uveo-parotid fever と診断しえた 2 例を報告する。

^{67}Ga -citrate scan でのサルコイドーシスの診断は, 肺病変については諸家の報告が多くみられるが, 肺外病変に関する報告は少なく, 特にブドウ膜, 耳下腺腫脹および発熱を伴う Uveo-parotid fever については, 1978 年 Owen らによる 1 例報告のみである。

唾液腺病変とサルコイドーシスの関連は, 1964 年 Greenberg らにより 6% に耳下腺腫大を認めた, あるいは, 1979 年 Winer らにより, 33% の症例に ^{67}Ga -citrate scan で両側耳下腺へ集積を認めたとの報告がある。一方, 悪性リンパ腫は, 肺門リンパ節腫大をきたし, ^{67}Ga -citrate scan でも異常集積を示すが, 唾液腺領域には, 放射線治療以前には集積を示さないといわれ, サルコイドーシスとの鑑別点と考える。

眼窩への ^{67}Ga -citrate scan での集積は, 正常でもしばしばみられるが, この症例のように高い集積の経験はなく, 病的と判断した。今後頸部軟部組織との比較による定量分析が必要かと考える。

サルコイドーシスの確定診断には, 生検が必要である。しかし, 全身の病変のひろがりには ^{67}Ga -citrate による全身スキャンはきわめて有効と考える。